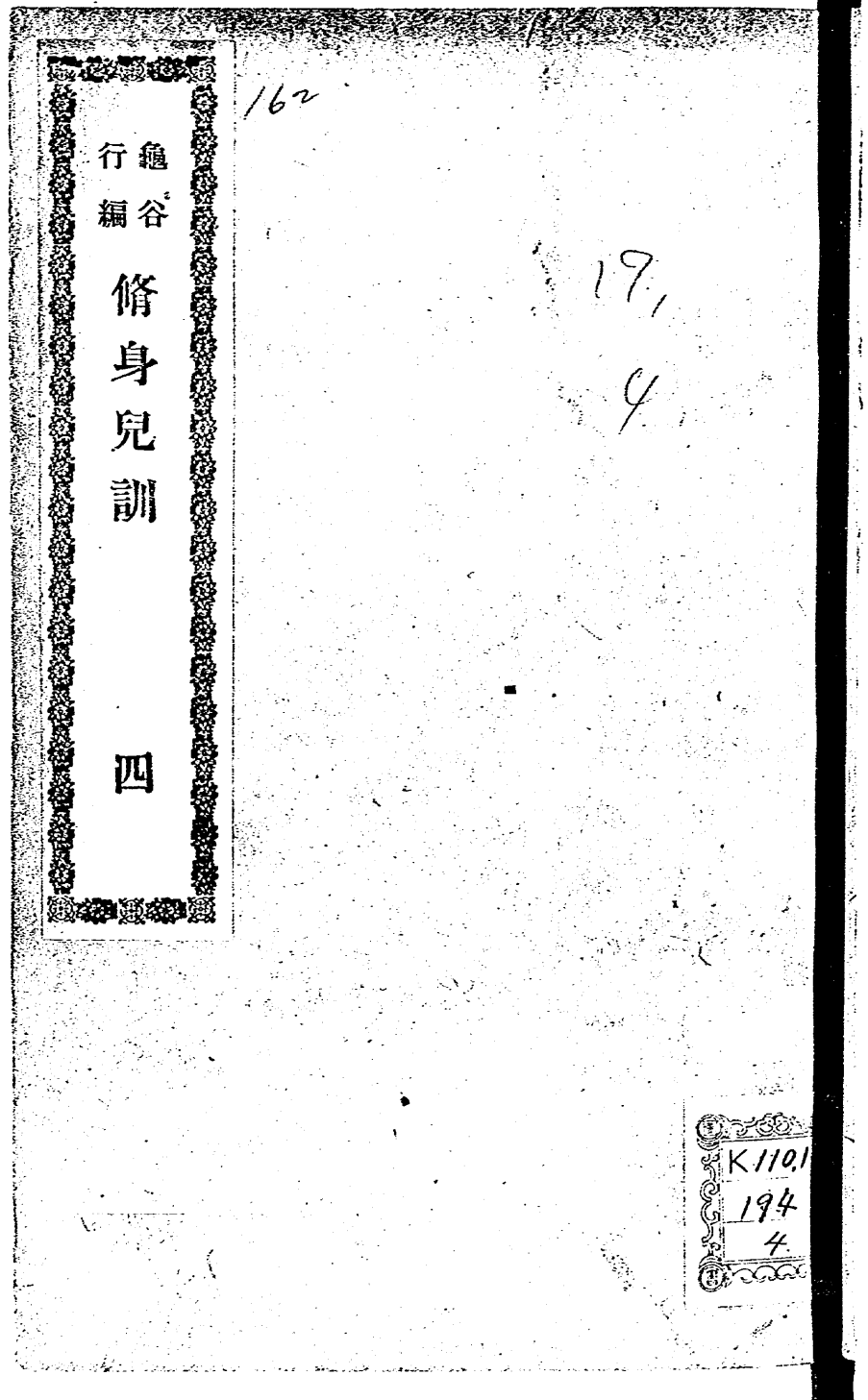


K110.1
99F

脩身兒訓卷之四

龜谷行編

第一章　厚德

○今の人。恩惠を受けては多く記省せざ。人よ惠む所ありまゝば。微物と雖ども。亦歴々心ゐ在り。古人言ふ。人よ施しては念ふ勿れ。施を受けてハ忘るゝ勿れと。（袁氏世範）

○凡恩澤を報いざるの地ゐ施さ。便是陰德

を積こ。以て子孫に遺をなり。人をして怒ると雖ども。敢て言をげらしむ。便是陰德を損する處なり。言行彙纂

○唐は王仲舒。寶帶を賣りて橋を澹臺湖に築く。長三十餘丈。以て行人を濟を。世之を寶帶橋と名づく。後三子皆貴顯なり。丹桂籍

○人妄りに樹木を毀損し。又蒸餅菓實。其他有益の物を棄つるは。是天の賜ものを無益に失ふは罪あり。若し此等は物を以て窮餒は者に與へば。慈惠の一端とるべし。勸善訓蒙

○晉陵の梅鱗。生平義を重んじ。慷慨施を好む中年子なし。善を嗜むこと益篤し。親戚窘乏は者あらば輒之を救ふ。里黨の中咸仁人長者を以て之を頌を。後二子を生み。家業巨萬壽七十に至は。丹桂籍

○高郵の張百戶淮安に往き舟を湖堤に泛ぶ。遥に小船の波上に浮沈をるを見る。人あり舟は背に據り。救ひを呼ぶ。張急に白金十

兩を出し。漁舟を呼びて之を救ふ。至れば其子なり。同上

〇蜀漢は張裔。少くして楊恭と友とし善し。恭卒し。遺孤未だ數歲なるに。裔は恭が母を迎へて之に事へ。恭が子の爲めに婦を娶り。田宅を買ひて之に與ふ。人其義を重んじ。後に益州の太守と爲る。同上

〇宋は吳奎少き時甚貧し。後資政殿大學士に除せられ。青州に知たり。是に於て田を買ひ義莊となし。以て族黨朋友を賙し。沒するの日に至り。家に餘資なし。宋史吳奎傳

〇宋の祖無擇。人となり義を好みて。師友に篤し。少くして。孫明復に從ひ。經術を學び。又穆脩に從ひ。文章を爲る。兩人死す。力めて其遺文を求め。彙めて世に傳ふ。宋史祖無擇傳

〇宋は沈倫相位に在るの日。歲の饑ゆるに値ひ。鄉人乃粟を假る者に。皆之を與へ。殆んど千斛に至る。後又盡く其券を焚けり。宋史沈倫傳

○陳璲家甚貧し。義を行ふに急ふり。常に諸子を戒めて曰く。貧乏の者に遇たゞ。宜しく力に隨ひ之を賑ふべし。若し富を待て之を行ふたゞ。吾ゞ輩終に人を濟ふに期なからん。（畜德錄）

第二章　躬行

○荀子曰く。凡そ百事の成るや。必ず之を敬するに在り。其敗るゝや。必ず之を慢るに在り。故に敬怠に勝てば吉なり。怠敬に勝てば凶なり。

○貝原益軒曰く。凡そ事を作すに。始を謹み。終を慮るべ。過寡く悔少し。故に事を作すに先づ思ふ。思たゞして輕率に事を作せば。必ず過ちあり。過てば必ず悔あり。（初學知要）

○又曰く。學と思ひに原づくと雖ども。間思雜慮甚ゞ心術に害あり。學者須らく胸中をして泰然事なく。以て有用に思慮應接を待つべし。

○又曰く。輕惰。二社者ハ學を爲るの大病ふり輕き者ハ未ざ得ざる故以て既ふ得ると爲し。惰る者ハ悠緩ふして。進むこと能ハず。張子曰く。輕き故矯め。惰るを警ゑと。

○又曰く。學者固より當ふ勉强して懈らざる爲く。又須らく心志を寛舒にし。精神を愛養ゑべし。此の如くなれば。局促の態なく。從容の象あり。二ッの者並び行われて相悖らざるべし。

○陳了翁閒居ゑと雖ども。容止常ふ莊敬ふり。苟も言を發せず。一人家人と語る。家人戲ゑふ問ふ是實なりや否やと。公退て自ら責ること累日ふり。曰く。吾豈ふ人を欺くことあるや。何爲れぞ此問ひあるや。劉氏人譜

○宋の趙康靖。嘗て二瓶を几上ふ置き。一善念を起ゑ毎ふ。一白豆を投ず。惡念にハ一黑豆を投ず。始めは黑き者多し。既ふして絶て少し。久けれバ善惡都て忘る。瓶豆も亦用ゐ

び。丹桂籍

○清の張敦復曰く。人の家に居り。身を立つる。最奇戎好むべからざる。人能く倫常に於て缺くる所となく。起居動作家を治め人を待つ。事々矩度に合ちぶ。便是君子の人。豈に別に奇を尋ね怪を求むるけんや。聰齋訓語

○宋の劉元城。司馬温公を見て。心を盡し己を行ふ法要。以て終身之を行ふべき者を問ふ。温公曰く其は誠り。元城問ふ。之を行ふ何をか先にせん。温公曰く。妄語せざるより始まる。小學

○中庸に曰く君子の及ぶべからざる所は者も。其惟人の見ざる所か。程子曰く。學を闇室を欺かざるより始まる。

○元の許魯齋。河南を過ぐ。道に梨あり。衆爭ひ取りて之を啖ふ。魯齋獨り取らず。或人曰く。世亂れて主なし。之を取るも何ぞ傷らん。魯齋曰く。我が心獨り主なからんや。卒に取ら

ぞ〜て去る。丹桂籍

〇蘇黄門。凡そ日中爲せる所の事。夜必ず之を紙に記し。人其故を問ふ。曰く。事を爲せず必ず天理に循ふ。敢て記せざる者を。敢て爲さざるなり。同上

〇羅馬帝泰荅士。その志。善を行ふに急なり。毎夜。日間のなる所を省視し。或を一善なければ。懊惱して曰く。嗚呼。余一日を失ふと。西稗雜纂

〇佐藤一齋曰く。均しく是人なり。遊惰ふまゝば弱なり。一旦困苦をれば凶とある。意に愜へば柔ふり。一旦激發すれば剛となる。氣質の變化すること此の如し。言志錄

〇明乃蔡虚齋曰く。道德ある者は必ず多言せず。信義あふ者は必ず多言せず。才謀なる者を必ず多言せず。惟夫れ細人狂人妄人乃チ多言をるなり。劉氏人譜

〇明の薛敬軒曰く。人口を開けば皆能く禮

義を談じ。名節を論じ。利を見るに及ては必ず趨り。勢を見ては必ず附く。又禮義名節は何物なる哉知らざる也。畜德錄

○宋の邵康節。其子伯溫に告て曰く。汝固より當に善を爲すべし。亦須らく力を量り以て之を爲すべし。若し力を量らざれば。善と雖ども。亦爲す能からじ。同上

○宋の潘叔度は。呂伯恭と同年進士なり。叔度年長じて。其學伯恭に如こず。即首を俯し。

平心則無偏

弟子の禮を執り。之に師とし事へ。略難む色なし。朱子甚だ稱歎す。劉氏人譜

○明乃太祖曰く。凡そ人善あれば自ら矜るべからず。自から矜れば。善日に削らん。不善あらば。自ら恕し

べからず。自らら怒をれば惡日よ滋を。

○又曰く。人の常情。多く己レが能に矜り。多く人の過を言ふ。君子と然らず。人の善を揚げて。己レが善よ矜らず。人の過をゆるして。己レが過をゆるさず。

○自ら謙をれば。人愈服し。自から誇まば。人必ず疑ふ。我恭なれば。以て人の怒氣を平かよにべく。我貪ふまば。必ず人と爭端を啓くを致を。是皆我レよ存をる者ふる。金言

○明の文徵明。人乃過ち聞くを善ず。道ひ及ぶんと欲をる者あ注べ。必ず巧ふ他端を以て之を易へ。其說を竟つ忘めず。其孫震孟。狀元ふ中り。名行俱よ隆し。丹桂籍

○宋の范忠宣。子弟を戒めて曰く。人至愚を雖ども。人を責むるふは明なり。聰明なりと雖ども己レが怒をはとたた昏し。但當よ人を責むるの心を以て人を怒をべし。習是編

○韓非子曰く。智と目の如し。能く百歩の外

を見て。自から其睫を見ること能をゞ。故ゝ知るの難きは。人を見るに在らゞして。自ゝら見ほり在り。故ゝ曰く。自ゝら見る。之を明と謂ふ。

○力餘りあれバ好事を行ひ。力足らざれバ好心を存す。力足らゞして。勉めて好事を行ふ。眞ゝ是好事なり。力餘りありて。徒らゝ好心を存をるは。好心と謂をゞる也。習是編

○章文懿嘗て言ふ。學者身を奉をるゝ華侈を好むべからゞ。苟ゝ華侈を好めば。必ゞ貪り得るを事を致を。他日官ゝ居り。決して清白なること能をず。同上

○外ゝを樂易なる姿態を顯をし。快活なる情狀を現をも。内ゝ深沈の性質なけれバ。人ゝ尊敬せらゞゞ。西洋品行論

第三章　立志

○朱子曰く。學を爲をゝは。先づ須らく志を立つべし。志既ゝ立てバ。學問次第ゝ力を著

くべし。志を立るゝを定まらざれば。終に事を濟さず。

○王陽明年十一。師に問ふ何をか第一の事と爲る。師言ふ。書を讀ミ及第をるのみと。陽明の曰く。此未だ第一乃事とせず。第一の事を其聖賢さはに在るか。（畜德錄）

○福格斯曰く。失敗をれども屈せず。進ミ往きて止まざる人を。吾が望の深く屬をる所なり。一試して功を成し。浮泛ふして定らざる人に勝ること遠し。（歐米立志金言）

第四章　愛日

○晉の陶侃曰く。大禹を聖人なり。寸陰を惜めり。衆人に至りては。當に分陰を惜むべし。豈逸遊荒醉をべけんや。生て時に益なく。死して後に聞ゆること無きを。是自ら棄るふり。

○人あり。細々里王地窩尼修士に請ふ。若し間暇ありまば願くを謁見を得んと。王答へし

めて曰く。天我を戒め。常に閑暇あらしめず。

○若克孫曰く。世上の財貨を。耗散せと雖ども。後日の儉約に因り償ふことを得べし。今日失ふ所の光陰を誰か能く取り得る者有んや。（西稗雜纂 歐米立志金言）

第五章　學問

○司馬溫公曰く。書を誦を成さゝるべからず。或を馬上に在り。或は中夜寐られざる時に在りて。其文を詠じ。其義を思へば得る所多し。

○司馬溫公賓客に對し。賢愚長幼を問ふことなく。悉く疑事を以て之を問ふ。苟も取るべきあると有れば。手に隨て記錄し。或を客に對して即書し。率ねて以て常と爲す。（自警編）

○程子曰く。君子の學は必ず日に新なり。日に新ふる者を日に進む也。日に新ふらざる者を必ず日に退く。未だ進まずして退らざ

ふ者ハ有らざる也。

○貝原益軒曰く。日日ハ新さふする者也。一日も一日の工夫あり。一歳ハ三百六十日ハ工夫なり。若し積て十年に至らば。其長進をる所。測るべからざる。故ハ學者も日日ハ新さふをるを貴ぶ。

第六章　勉強

○中庸ハ曰く。人一さびして之を能くすれば。己は百さびし。人十たびして之を能くすれば。己も之を千さびに。果して此道を能せば。愚なりと雖ども必ず明ハ。柔なりと雖ども必ず強し。

○漢の董仲舒曰く。事も勉強ふ在り。勉強して學問をれば。聞見博くして智益明なり。勉強して道を行へば。德日ハ起りて大ハ功あり。

○漢の盧植も。馬融ハ學びて。能く古今に通ず。融ゞ外戚ハ豪家ふり。多く歌舞を列ぬ。植

侍講をること積年。未ざ嘗て回顧せざ。融是を以て之を敬す。後漢書盧植傳

○銹は鐵を腐爛をるは。砥石をりも疾く。怠惰の人は傷害をるも。工作の勞よりも速かなり。西洋品行論

○人は一生も。始より終に至るまで。經驗習練の大學校を看做をべし。時ありて艱難辛苦は事に遇ふとも。之を天命ぞと思ひ。務めて學習せざるべからず。同上

第七章　倫常

○韓伯俞少しく過あり。其母之を笞つ。伯俞涕下る。母は曰く。他日笞てども汝未ざ嘗て泣かず。今泣くは何ぞや。對て曰く。昔は笞を受て痛めり。今母衰老して力乏し。また痛ましむること能はず。是を以て泣くなり。習是編

○顧悌父の書は得れば。必ず拜跪して之を讀む。句毎に應諾す。後子孫繁盛比ひなし。丹桂籍

○父母卑賤ふして。我幸に貴きことを得ざ。父母に恩を忘ることなく。之を尊敬せべし。若し高位高官に昇り。父母に恩を忘る者を。其罪尤も大ふりとせ。訓蒙善

○貝原益軒曰く。毎日夙に起きて家庭を掃除し。先づ父母の氣色を候ひ。飲食乃好む所を問て之を進め。求めあらバ之を奉じ。勉て其歡心を盡すべし。訓家道

第八章　處世

○呂叔簡曰く。世間往く處として意に拂る事ふさは無し。一日をして意に拂る事なかを無し。惟度量寛弘なれバ受用の處あり。彼は局量褊淺なる者は。空しく自ら懊恨をるのみ。畜德錄

○人剛を好めば。我柔を以て之に勝ち。人術を用ゐば。我誠を以て之を感じ。人氣を使へバ。我理を以て之を屈せれば。天下處し難きは事ふし。紳瑜

○人の我に負く共以て。善を爲に心を隳さこと勿れ。其德を施さに當りて。たゞ自のら我が心の忍びざる所を行ふ也。未だ嘗て報を責めざは也。縱ひよのらざる者に遇ふも。只一笑に付せよ。金言

○人の善性を發出さるは。患難禍災より善きはなし。譬へば香草は壓搾せられて。馥郁さる香氣を發さるが如し。西洋品行論

○義爾士金の詩に曰く。禍難と苦痛を覺ゑ

ざせと雖ども。實に福慶の積塊なり。然れども禍難の中より福慶を視出さ人少なし。余を禍難を以て。余を試るは洪爐とふし。余を鑄るの造錢局と思へり。西洋品行論

○利久手爾曰く。人貧困を受くとも。何ぞ怨謗不平乃語を出さを用ゐんや。貧困は恰も處女の耳孔刺るゝの痛みに過ぎざるのみ。而して其創の中に貴重の寶玉を掛るこを得べし。歐米立志金言

○衆人廣坐の中よは爭論を慎むべし。爭論
も必ず黨派を起す。若し衆中よ爭論發せば。
温厚の言戯謔は語を以て。之を勸解すべし。
智氏家訓

○人は謗り果して實ならば。深く自ら悔責
すべし。躬よ省りて愧づること無くんば。
只之を聽のんのみ。前人云ふ。何を以て謗り
を止めん。曰く。辯ずること無し。辯ずること
愈力むべ。謗ること愈巧なりと。金言

○凡族衆假貸する所あらば。吾が力量の厚
薄よ隨ひ之を與ふべし。必ずしも還せと言
はば。縱ひ其欲よ滿さずして之を怨むるも。
亦償ひを責ずる時の甚しきよ至らば。習是編

○事を處する最熟思緩處すべし。熟思すれ
ば其情を得。緩處すれば其當を得。最輕忽忙
亂すべからば。至微至易の者と雖ども。皆慎
重を以て之を處すべし。同上

○泛交あれば費多く。費多ければ營ち多し。

營ミ多ケレバ求多シ。求多ケレバ辱多シ。惟事を省きて廉を養ひ。交を慎ミ以て德を成さゝべし。願體集

○高きに居て。みづから卑くすれば。愈光あり。卑きに居て自ら高ぶれば。愈望ミなし。靜寄軒文集

○凡國家の禮文制度法律條例の類。若し能く熟觀して深考せば。以て世務に應酬し。時宜に戾らざるべし。紳瑜

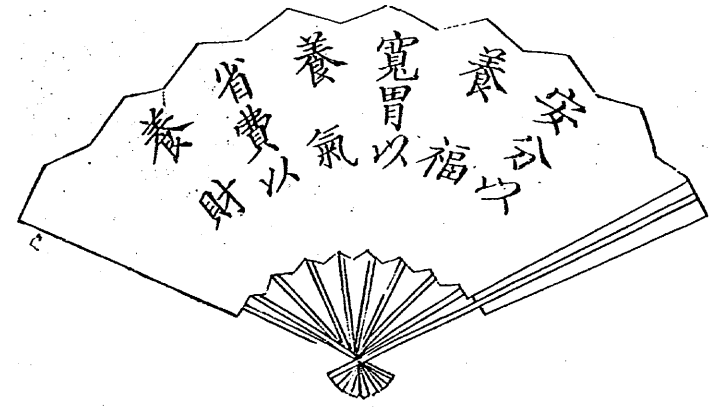
○富貴の家に。貧賤なる親戚の出入をはゝ。主人仁愛に厚きこと顯まし。其家に榮譽あり。然るに或之を恥る者あり。豈誤りならずや。家訓

第九章　交際

○君子の交りや。道義を以て合ひ。志氣を以て親ミ。淡きこと水の如し。故に能く久し。小人の交りや。勢利を以て結び。酒食を以て親み。甘きこと醴の如し。故に怨み易し。習是編

○貝原益軒曰く。君子の人と接る禮讓を以てに。故ふ爭ふ所なし。夫れ才能を爭ひ。功業を爭ひ。權力を爭ひ。意氣を爭ふ。皆小人の爲る所。禮讓の道と非ず。且禍を取る其道ふ至。

○人不義の事を爲る



を見ず。諫めて之を止むべし。知て諫ゑず。諫めて力めず。友我して過ちを遂げ成さしむるは。亦我が咎なり。智氏家訓

第十章　家制

○貧富俱と勤儉の二字を欠得ず。勤ハ孜々利を爲るに非ず。唯力を竭して經營るると在り。儉と鄙吝堪へざると非ず。只是入を量りて出ることを爲るなり。習是編

○苟くも節儉として。其家を保ち。其生を送

りふべ。資産を小なれども精神ハ大なることを得べし。然らずして。徒らに金錢を慕ひ。此人を極て貧しと言ふも亦可なり。西洋品行論

○主人は一家の摸範なり我能く勤めむ。衆何ぞ敢て惰らん。我能く儉ならば。衆何ぞ敢て奢らん。我能く公ならむ。衆何ぞ敢て私せん。我能く誠ならば。衆何ぞ敢て偽らん。願體集

○他人の僮僕。我を遇するに或ハ不恭あるも。彼と我と主僕の分なし。較ぶるに足らず。若し自己の僕婢を之を戒飾すべし。智氏家訓

○權家ハ奴僕ハ。主人の權威を挾みて賓客を侮り易し。主人なる者。時々心を用ゐて無禮を戒むべし。奴隷の無禮を責むるに足らば。賓客恚ゐて其主人を誹るに至ること。家道訓

○陳確修曰く。此輩惟智慧なし。故に奴僕と爲る。若し亦智慧あらむ下賤と爲らずと。此

を以て心に存せず。自ら苛求せるに至らず。丹桂籍

第十一章　改過

○周子曰く。仲由は過を聞くことを喜びて令名窮りなし。今人過あれば。人の規をこと を喜ばず。疾を護して醫を忌むが如し。寧ろ其身を滅すとも悟るあたはざるなり。

○魏の陽固は。少くして任俠。劍客を好む。生産を事とせず。年二十六。始て節を折り學を好み。遂に博覽文才あり。魏書陽尼傳

○唐の李安遠少くして檢束なし。無賴の徒と遊び。産を破るに至る。晩に節を折り學に嚮ひ。士大夫に從ふ。苟くも己に勝れば。必ず心を傾けて之に交る。安遠後に懷州の刺史に至る。新唐書裴寂傳

○唐の趙武孟少くして遊獵し。獲る所を以て其母に饋る。母泣て曰く。汝書を好まずして敖蕩せ。吾安んぞ望んやと。爲に食せず。武

孟感激し。遂に力學して右臺侍御史となり。河西人物志一篇を著せ。新唐書趙彦昭傳

第十二章　警戒

○善を爲せハ。重を負て山に登るが如し。志已に確さしと雖ども。力なを及ざるを恐る。惡を爲せハ。駿馬に乘て坂を走るが如し。鞭策を加へずと雖ども。足亦止むこと能ず。省心雜言

○堯戒ふ曰く戰々慄々ゝ。日に一日を慎む。人。山に躓づくこと無くして垤に躓づく。是故ふ人皆小害を輕ド。微事を易どり。以て患を招くに至る。初學知要

○貧賤ハ勤儉を生ド。勤儉ハ富貴を生ド。富貴ハ驕奢を生ド。驕奢は淫佚を生ド。淫佚ハ復貧賤を生ド。此循環の情理なり。多識編

○一切の事。俱に儉朴誠實を要ス。浮華を學ぶべからず。蓋し浮華ハ一時ハ光耀ス。と雖ども。究に實事ふ益なし。人ハ名を敗り禍ハ

得る者。都て奢侈の致す所より由る。石天基知世事

○人生。世より於て未ざ心力を勞せざる者あらじ。或た心を勞して力我勞せじ。或い力を勞して心我勞せじ。若し心を勞せず。又力我勞せざれば。乃ち饑莩無用の人なり。紳瑜

○佐藤一齋曰く。少しく才ある者た。往々好て人を輕侮し。人を調笑た。失德と謂ふべし。侮を受る者徒らに已まじ。必ず憾こく之を譖る。即ち自から譖るふり。言志錄

○幼くして肯て長ずる事へじ。賤くして肯て貴ずる事へず。愚にして肯て賢ずる事へじ。此た是レ人の三不祥なり。總て是レ傲氣害を爲たるのみ。世人先づ傲氣を除き去り。纔ず事我成じを得べし。知世事

○貴くして傲慢なる人た。氣球の膨脹して昇騰せる者ず等し。只其外貌を裝飾して。內部た實ず空虛なり。勸懲雜話

○日耳曼人の語ず曰く大人の品行の中ず

於て其瑕疵あるを搜り出せを以て專務となし人あり。痛べきの性情と謂べし。西洋品行論

○貝原益軒曰く。易に曰く。天道は滿つる戍虧くと。又古語に曰く。多く藏むれば厚く失ふと。蓋し多く財を聚めて人の貧苦を救はざれば。必ず其財を失ふに至る。家道訓

○程子曰く。吾未だ財に當ふして。能く善戍爲せる者を見ざる也。吾未だ誠あらずして。能く善戍爲す者を見ざるなり。畜德錄

○餘り有るを待て人を救はゞ。必ず人を濟ふの日なし。暇あるを待て書を讀まば。終に書を讀むの時なし。紳瑜

○人の書籍を翻へし。人の書案戍塗り。人の花木を折り損ふは。みな人に厭はるゝの事なり。竊に人の篋中の字跡を窺ふは。尤も不可なり。金言

○仙培那德曰く。我他人をして害を受くとも。之を忍べば轉じて有用の物となるを得べ

し。唯吾が眞實の害となり。苦患を與ふる者
なり。自己の過失より由りて得さるもれせ。西洋品行論

○陳幾亭曰く。君子より二の恥あり。能くする
所より矜る恥なり。能くせざる所を飾る恥ふ
り。能くなれば謙して以て之より居り。能くせ
ざるべば學びて以て之より充つ。畜德錄

○洪自誠曰く。耳中常に耳ふ逆ふの言を聞
き。心中常より心に拂るれ事なり。纔より是德より

進ミ行を修むるの砥石ふり。若し言々耳を
悅ばし。事々心を快くせば。便此生を把て鴆
毒の中より埋むるなり。菜根談

修身兒訓卷之四終

附録

楊子雲前漢人 陸宣公名唐贄人 程子來人稱ヲ明道伊川ト稱シ兄弟ヲ光ト字ス 荀子周人荀卿ト稱ス 陸桴亭明世儀人 光武後漢帝劉秀 韓退之唐人名 程子宋人名光字伊川 費元分 陶淵明晉人 倪文節宋人名 陳幾亭明人 魏環溪清樞人 韓野宋人名 胡文定安國 呂叔簡明人 倪正父明人 辛文懿明人 劉甫名思正 宗周明人 許平仲元人 舒大清純人 薛文清明人名瑄 顏之推齊人 馬援伊人 馬公子 譚子 司馬溫公 陳了翁明人 周子明人 洪自誠明人 陳瑑明人 蘇黄門 顧悌 陳確修 張敦頤宋人名 百戸 鄭叔通 梅鱗 以上六人其履歷ヲ詳ニセズ 益明ナリ 彌爾烈爾 坡可羅 禮諾爾圖 古斯敦英人 福格斯 谷惹西 戎孫 勃若克 孫義爾士金 那比爾 伯氏 倍根 コルース プロナトン スマイルス リ ツトン 富爾拉 セレル 究林登右人 十九未ダ詳ナラザル者アリト雖リモ大抵英國人ニ係ル 利久手爾曼人 日耳

版權免許
明治十三年十一月廿五日版權免許
同　十四年六月二日出版
同　十五年五月三十一日再版
同　十七年四月十一日三版御届
同　年八月三日四版御届

定價九錢五厘

東京府士族光風社長
編輯并出版人　龜谷行
東京神田區金沢町拾壹番地

中近堂
東京京橋區銀座二丁目五番地

發賣書林

中近堂支店
名古屋東本重町一丁目百十一番地

中近堂支店
大坂備後町四丁目四十一番地

龜谷檢査之印
近堂印

亀谷行編

脩身兒訓

五

17,4

K 110.1
35
5